

# 弁内侍

ツレ女 梅枝

シテ 弁内侍

男 師直従者

ヲカシ 輿丁

ツレ男 内侍従者

ワキ 楠正行

地は 大和、河内

季は 雜

「是は三位行氏卿の北の御方に仕へ申す。梅が枝と申す女にて候。さても大和の三吉野や。賀名生の皇居におはします。弁の内侍と申す御方は。先帝の宮女なりしが。君雲隠れの其後は。かすかなる御住居にて渡らせ給ふ由聞し召し。せめて慰め申さんと。御迎の其為めに。唯今吉野へ参るなり。そもそも此内侍は頼みし人の。姪君にてましますが。天が下に並びなき美人にて。呼ばひ渡らぬ人も無きに。かやうに主なき花となり。散りなん後の痛はしさよ。

下歌  
「事問ひ給ふ叔母君の。心の奥も白糸の。

上歌  
「乱れがましき世の中に。く。誰を頼みて吉野山。花より外は知る人も。あらぬ浮世の山嵐。誰が身の上に散すらん。く。

詞  
「急ぎ候ふ間。吉野に着きて候。是なるが内侍の御座候ふ処の由申し候。まづく案内申さうするに

て候。いかに案内申し候はん。叔母君の御方より。梅が枝が御使に参りて候。それ／＼御申し候へ。

シテ「有りし世の宿の氣色を訪ふものは。秋の夜の月庭の松風。実にや木に離るゝ藤。君に後るゝ侍女。あら便りなの我等が有様やな。

ツレ詞「いかに案内申し候。

シテ詞「女性の声して音なふはいかなる人ぞ。

ツレ「是は都の叔母君より。梅が枝が御使に参りて候。

シテ「あら思ひ設けずや。何の為の御使ぞ。殊に梅が枝ならば此方へ來り候へ。

ツレ「是は御声にて候。遙に見奉らず候へば。いよ／＼およすげおはしまし候。御文の参り候。是々御覽候へ。

シテ「あらうれしや母君には捨てられ。今は叔母君をこそ。親とも思ひ参らするに。御消息の珍しや。まづ／＼御文を見うずるにて候。遙にこそ渡らせ給

袂をしほりあへず。御恋しさのいとせめて。住吉へまうで侍りし程に。道の便りも然るべければ。逢ひ奉らん事を思ひ。河内の国高安に。知る人ありて参り候。待ち奉るばかりなり。かゝる乱れの世の中に。又逢ふ事も片糸の。よるべぞ急いで御出であれ。奥に一首の歌もあり。逢ひ見んと思ふ心を先立てゝ。袖に知られぬ道芝の露。

地「實に珍しやなつかしや。朝夕恋ひし叔母君に。見々えん事のうれしやと。使とつれて侍女二人。く。  
青侍を二三人。忍びて出づる仮輿の。道のさかしきも。逢ふを便りの心にて。急ぐ行方の道遠し。  
く。

男詞「や。是は弁の局にてましますか。叔母君はかへり申しの事有りて。まだ住吉へましますなり。あれへ御輿をなし申せ。

「其住吉とは津の国の。青きが原の遠き境。それは  
遙かの旅の道。かりそめぶりに行きがたし。まづ  
く吉野へ立ち帰り。重ねてこそは参るべし。早々  
輿をかきもどせ。」

ヲカシ  
「畏つて候ふとて。お輿を跡へ昇きもどせば。」

男  
「いや是非共にと引つ立てゆく。」

ツレ男  
「狼籍なりと制すれば。」

地  
「大勢中に取り込めて。供の侍切り伏せ。御輿を中

に飛ばせつゝ。遙に道を行き過ぐる。く。」

「是は河内の国楠帶刀正行にて候。吉野殿へ召され  
候ふまゝ。唯今参内仕り候。や。向ふより女輿と  
見えて來り候。皆々道をよけて通し候へ。あら不  
思議や。今の輿の内にて。女の泣声いかさま子細  
候ふべし。其輿待てとこそ。其輿の内の女つれて  
來り候へ。や。是はやんごとなき御方にて候ふが。  
いかなる謂れにより御愁歎候ふぞ。子細を御物語

り候へ。

シテ

「是は吉野先帝の宮女。弁の内侍と申す者にて候ふ  
が。叔母君河内の高安とやらんに居ますとて。対  
面の為めとて行き向ふに。荒けなき男子共まうで  
来て。わらはが家人を害し。かやうに奪ひ参る程  
に。いと恐ろしく鬼にとらるゝ心して。かくまで  
歎き侍ふなり。

ワキ詞

「あら御痛はしや。さては弁の内侍にて御入り候ふ

かや。いかさま子細有るべし。あの狼藉者ども一々  
召し捕り候へ。さて其迎の女とは汝が事か。いか  
さま子細有るべし。真直に申し候へ。少しも偽ら  
ば重く曲事すべし。急いで語り候へ。

クリ地

「今は何をか包み参らせ候ふべき。内侍の御事をい  
かにして聞き及び給ふらん。高の師直色好み給へ  
ば恋ひ渡り。叔母君をすかし給ふ。

ツレサシ  
「其前度々艶書通ひしかども。

地

「更に承け引き給はねば。行氏卿の北の方を。ひたすらにたのむの雁の。数々の所知賜はらん。官位をも進め参らせんと。様々頼ませ給ふにより。今世の恐ろしさ。又内侍の御為めにも末頼もしくや有るらんと。わらはにも禄賜はり。たばかりごとの御使なり。召し捕り給ふ力士は。師直の御家人御迎の者なり。我等とても中々空恐ろしく思へども。否といはゞ稻舟の。いかなる目にか逢ふべし給へと手を合す。

シテ

「我はかくとも白波の。

地  
「只盜人の手に渡り。如何なる目にか逢坂の。せきあへぬ涙の色。知ろしめしてかくまで。はからひ給ふ正行は。唯氏の神と覚ゆると。御悦びはことわりや。

ワキ詞

「今こそ子細を承りて候へ。誠に参り合ひ奉らずは。

敵の手に入り給ふべし。かしこう行き合ひ奉りて候。いかなる者ぞと存じて候ふに。さては師直が下人共にて候ふか。誰かある一々頭を刎ね行路に晒し候へ。早御急ぎ候ふ程に。是は勝手の御宝前にて候。是もひとへに仏神の御加護なれば。此拝殿にて法楽に一指御舞ひ候へ。

シテ「恥かしながら返り申すも。誠に諸神の恵みなれば。昔し静の舞の衣装。烏帽子を暫し仮に着て。

五節の袖を思ひ出の。袖を返して舞ふとかや。

地「しづやしづ。 (舞)

シテ「しづやしづ。しづのをだまきくり返し。

地「昔を今にくり返し。君を都に還幸なして。我身も供奉し奉らんと。祈る真袖を翻へし。かへる心もいさみある。楠と伴ひ二たび皇居へ。立ち帰るこそうれしけれ。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション 『謡曲評釈 第二輯』 大和田建樹 著